

ただ今、新十一歳、ピチピチ修業中です

志茂田景樹

しもだ かげき
(作家)



「よい子に読み聞かせ隊」を結成したのは一九九九年八月のことでした。その一年弱前から読み聞かせ活動を始めていましたが、仲間が十人を超え、活動域が全国に広がったのを機に絆を強めようという思いがあつたことでした。

まだ浅い経験でしたが、この頃の僕は子ども達の大人の本心を見抜く直感力に度々瞠目させられていました。

子どもは大人の上から視線をたいへん嫌がります。言葉に出さなくても、

(これから読み聞かせをしてあげるから、みんなちゃんと聞きなさいね)

といった押し付け意識があると、始める前から引いてしまいます。

(この絵本を僕が読んでみんなに聞いてもらうけど、一緒にこの絵本の世界に入ってみようよ、みんなで楽しもうよ)

言葉で表すところいうことになりませんが、いちいち言う必要もないのです。実

際に子ども達に溶け込み、こっちも楽しんでしまえばいいわけです。

大分、後のことですが、読み聞かせを終え、サイン会に移ったとき、僕のレインボーカラーの頭に見入っていた五歳ぐらいの男の子が、いきなり、

「そんな頭をしているのはカワイイと誉められたいからだろ？」

と、言ったのです。

一瞬、僕は虚をつかれましたが、

「そうだよ、カワイイと言われたいからなんだ」

と、笑って強くうなずきました。

男の子はカワイイを、かっこいい、似合っている、きれいな、など幅広い意味で使ったのです。

自分が気分いいからだろ、という意味も含まれていたかもしれせん。いずれにしても、十二分に図星だったのです。

「よい子に読み聞かせ隊」を結成、と言

っても、居酒屋で、何の規約も作らず楽しくやっていこうよ、と申し合わせた程度でしたが、僕はその席で来年(二〇〇〇年)の三月二十五日、新ゼロ歳になろう、と心に決めました。

その日、僕は実年齢で満六十歳を迎えます。

暦を一巡りするのならその日、新ゼロ歳になろう、新ゼロ歳だから大きな夢を描くこともできる、楽しい目標を掲げたつていい、新ゼロ歳だから二歳三歳の子どもにも教えられることがいっぱいある、ということでした。

そして、その日、僕はたいへん清々しい気持ちで新ゼロ歳の目覚めを迎えることができました。

別にこの日を迎えなくても子ども達から得ることばかりでしたが、実はこの誕生日の十日ほど前にも大きな得を得ていました。「よい子に読み聞かせ隊」は、その日、兵庫県の西宮市立瓦林かわらばやし小学校を訪れたのですが、この小学校には五

年前(一九九五年)の阪神大震災を乳幼児や、園児で迎えた児童が大勢いたのです。夜中に叫び声を上げて飛び起きたり、トラック通過時のわずかな震動でも怖れ

おののいて身近な大人にしがみつくなど、
いまだに心にその傷跡を抱えた児童も多
いとも聞かされました。

そうした児童の心のケアになるのでは
ないかとPTAが考え、僕らを呼んでく
れたのでした。

体育館に全校児童、教職員、PTA、
地域の人たちが集まり、僕らを歓声で迎
え入れてくれました。僕は悲しい場面が
あつて涙を流しても、第一に命がいかに
尊いかが、第二に生きることがどんなに
素晴らしいかが伝わる絵本を読み、ある
いは絵本を見ずに語りました。深く感動
して流す涙は何よりも心を癒す、と確信
していたからです。

結果は意外なほどに多数の児童が涙を
見せてくれました。終えてサイン会に移
る間、何人もの児童が僕や、音楽メンバ
ーにまつわりついて離れなかつたのです。
サイン会は長蛇の列ができ、夜にかか
ってもまだ順番を待っている親子連れが
いました。「よい子に読み聞かせ隊」は
命の尊さと生きることの素晴らしさを絵
本の読み聞かせで得られる感動を通して
子ども達に強く伝えていくことを柱にし
ていますが、その柱はこのときの読み聞

かせで立ったような気がします。

僕について言えば元氣と若さの三本柱
は読み聞かせを第一に、ウォーキング、
玄米と続きます。この三本柱が三位一体
のように確立したのは読み聞かせを始め
てからです。

つまり、新ゼロ歳になる前から大いに
得をさせてもらっているわけです。その
得は子ども達の心に飛び込み、そこで拾
うことのできた豊かな感性が産みだして

くれました。

ただ今、新十一歳。今回の地震、津波、
原発災害の子ども達が多く避難している
避難所読み聞かせ慰問巡りを栃木県内か
ら始めたところですが、この子ども達と
ともに楽しい世界に入ること、その心
に少しでも平安を招き入れることができ
たら、これほど嬉しいことはありません。
そのとき、僕はまた心に大きな得をい
ただくのかもしれません。